

篠栗街道物語(中編)

今回は、篠栗街道の成立とそれにまつわる村の成立について話を進めていきます。

黒田家は国替え当初、小早川秀秋が居城としていた糟屋郡名島城へ入城しましたが、黒田如水・長政親子は、城下町建設には不向きであるとして、那珂郡福岡(現在の大濠公園の中央)の地を選んで、新たに城を築城しました。

そもそも黒田家は、備前国(現岡山県)から九州の地へ移されてきたわけですが、城下町の建設に際しては、その出身地である「邑久郡福岡」にあやかっつて、「福岡」という地名を名付け、ここに黒田藩＝福岡藩が成立することになったわけです。

城を中心とした城下町の計画を進める一方で、主要な街道をこの城下町に接続する事業にも着手

しました。唐津方面から

糸島・姪浜を経て城下を経由し、箱崎や黒崎(現北九州市)方面へ向けて北上する街道を「唐津街道」(別名、内宿通り)、この唐津街道で博多を抜ける石堂橋から東の飯塚方面へ向けて分岐する街道を「篠栗街道」と呼び、

ほかに「長崎街道」・「秋月街道」・「日田街道」など、短期間の内に国の動脈を完成させていきました。

豊前国細川家との緊張関係がこれらの整備を必要としたことを前回触れましたが、篠栗街道にしてもほかの街道にしても、その前身となる道筋をうまく利用しながら、街道を早期に整備したと見る方がより妥当なのかもしれません。

さて、街道整備に伴って、そこを通過する郡部の村々の再編も余儀なくされます。筑前国には十五(注1)の郡があり、江戸時代には糟屋郡だけでも九十か村近い村々があったようです。現在でも「住所表記」に「大字注2」がついている場所には江戸時代に「村」があり、「庄屋」がいたことを表しており、その名残を垣間見ることが出来ます。このように村が多い理由に

は、実は秘められた黒田家の過去と街道整備に起因した歴史の裏話がありますので、少し触れておきましょう。

筑前国の領主となる以前、豊前一国を任された黒田家でしたが、そこには宇都宮鎮房という土豪の武将が勢力を揮っていました。宇都宮氏は、鎌倉時代から地頭職を任せられた家柄で、黒田家の着任は面白く思っています。

黒田家が出陣するために出す出兵要請にも応じようとはせず、ついに両者は戦(いくさ)となつてしまします。苦戦を強いられた黒田勢でしたが、豊臣秀吉からの援軍を得て、何とか宇都宮氏を降服させることが出来ました。しかし、いつ寝首を掻かれるか分からない状況です。そこで、酒宴を催すと偽って、宇都宮氏をはじめ、家臣まで謀殺してしまおう事態を招いてしまいました。

しかし、筑前国を支配していく上では、この事件は教訓になつたらしく、筑前国内に古くからいる土豪勢力に対し、「黒田家の家臣となる」か、「武士を捨てて代わりに、各村の庄屋職に就任する」か、といった二つの条件を出し、新たなもめごとの種を増やさないように怀柔政策をとつたのです。各土豪の武士たちも人生の

岐路に立たされて悩みぬいたでしょうが、黒田家に仕えて「新参者」と呼ばれるよりは、村の庄屋となつて土地を安堵される方を選ぶ武将が多かつたようです。大きな村に複数の武将がいれば、村を分割して支配させました。これが江戸時代に村々が多数成立する要因となつたわけです。

また、これとは別に、街道整備に伴って「宿場」(宿泊場所)や「間の村」(主に休憩場所)と呼ばれる施設を集めた場所(これを「町立て」という)も必要で、長政の命令によつて開村した村もありました。とくに篠栗街道では、新長者町(現粕屋町原町)や篠栗村のように町立てを急拵えで行つた村々もあつたのです。

【後編へつづく】

※文中の敬称は略しました。

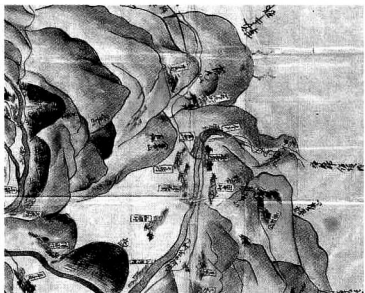
注1) 糟屋郡は表と裏に分郡されており、十六郡とする場合もあります。

注2) 明治時代以降に大きな村を分けて「大字」を付けたものもありますので、すべてが江戸時代に起因しているわけではありません。

参考文献

「物語 福岡藩史」文献出版
「街道と宿場町」海鳥社

篠栗町文化財専門委員・
篠栗古文書会員



正保年間の絵図

(福岡県立図書館所蔵)